

平成 30 年 5 月 29 日現在

機関番号：21601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26463404

研究課題名(和文) 軽度発達障害・被虐待による行動異常を早期発見・早期対応する手法の開発

研究課題名(英文) Team-based parent training by child specialists improved behavioral abnormalities in maltreated preschool children

研究代表者

横山 浩之 (HIROYUKI, YOKOYAMA)

福島県立医科大学・公私立大学の部局等・教授

研究者番号：40271952

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：マルトリートメントによる幼児の行動異常に対して、保育士・幼稚園教諭が愛着形成習得を目指してペアレントトレーニング技法を用いたチームアプローチによって対応し、行動異常を改善できるかどうかを検討した。期間内に8名の対象児のうち7名で特別な配慮がいらぬ程度までに行動異常が改善した。過去の小・中学生を対象とした介入と比較して良い結果を得たが、介入には2～4年の長期を要した。今後、同様の手法を用いて、より労力のすくない予防的アプローチの検討に期待が寄せられる。

研究成果の概要(英文)：This study assessed the effects of the Parent Training (PT) technique, in which child specialists (CSs) such as preschool teachers promote secure attachment in children with aberrant social behavior following maltreatment, using a team approach. Behavioral abnormalities in both school and home resolved in 7 out of 8 cases. These cases received the intervention for 2 to 4 years. This study indicates that the PT technique as applied by child specialists using a team approach may be a useful intervention for fostering secure attachment in children with maltreatment who exhibit behavioral abnormalities. Early detection and intervention are necessary to address successfully the behavioral abnormalities of children with maltreatment.

研究分野：小児行動医学

キーワード：マルトリートメント ペアレントトレーニング技法 支援者 虐待 チームアプローチ

1. 研究開始当初の背景

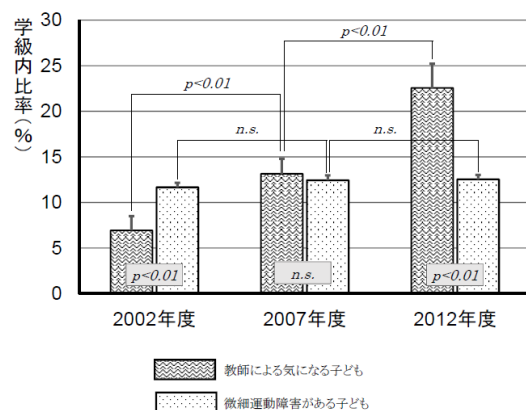
我々は、これまでの研究で以下のことを明らかにしてきた。平成 20~22 年度の科研費基盤(C)「軽度発達障害を看護支援するペアレントトレーニングの研究」では、注意欠陥多動性障害の子どもへの支援方法であるペアレントトレーニングを、日本の国民性にあわせて改変し、小中学校など子ども集団でも有用であることを証明した。加えて、自閉症スペクトルがある子どもにも有用な技法を見いだした。

平成 23~25 年度の科研費基盤(C)「軽度発達障害の幼児を看護支援するペアレントトレーニングと被虐待児への応用」では、平成 20~22 年に開発した手法が、軽度発達障害がある幼児期の子どもでも有用な手段であることを証明した。あわせて、小中学校での被虐待児への応用を試み、愛着形成の再獲得過程を担当する役割(=母親役)の教員を配置するチームアプローチとペアレントトレーニングの手法とにより、小中学校での被虐待児の行動異常を修正し得た。

以上の研究過程で浮かび上がってきたのは、行動異常がある子どもの増加である。微細運動障害(=発達障害が疑われる)によるスクリーニングをかけられた子どもの数はほぼ一定している。これに対して、教師による行動観察(=発達障害あるいは不適切な子育てが疑われる)で異常を指摘される子どもはこの 10 年で有意に増加している(図 1)。

2002 年では微細運動障害がある子どもが教師の行動観察によって異常を指摘される子どもより有意に多かったのに対し、2012 年ではそれが逆転している。このことは、小児保健・学校保健上の課題として、不適切な子育てによって引き起こされる行動異常が、急激に増加していることを意味している。

図 1 教師による気になる子どもの増加



これまで行ってきたペアレントトレーニング(PT)の研究では、行動異常が明らかになった子どもへの対処方法を子ども集団の中で行えるようにする検討であった。すなわち、幼児期から学童期における発達障害による行動異常、および、学童期における虐待に

よる行動異常を改善させるための手法を開発してきた。

先に示したように、昨今の小児保健・学校保健上の課題が不適切な子育て(マルトリートメント)によって引き起こされる行動異常へと変化しつつある以上、PT手法の新たな展開として、不適切な子育て(虐待)によって引き起こされる行動異常の予防が研究課題として浮かび上がる。

2. 研究の目的

発達障害ならびにマルトリートメントによって引き起こされる行動異常への予防であるため、今後の研究は以下の5つの観点から検討する必要がある。

幼児期の被虐待児および子ども集団へのPT手法の有用性の確認、幼児期の被虐待児に特有の支援方法の確立(以上は三次予防的アプローチ)、幼児期・学童期を通して、発達障害・虐待を問わず、行動異常を認める幼児・児童を早期発見する方法の確立、

早期発見した幼児・児童に対する、PT手法を応用した新たな手法の開発(二次予防)、上述の一次・二次予防の手法の行政における活用方法の検討である。

上述の ~ については、本研究において実際に研究協力自治体等にて試行し、成果を検討する。

~ については、研究協力自治体の地域診断から、今後の検討に必要な基礎的な情報収集を行うこととした。

3. 研究の方法

これまで開発してきたPT手法が、行動異常がある幼児期の子どもの行動異常を改善するかどうかを調べる。

マルトリートメントによる行動異常を呈する学童においては、養護教諭を中心として愛着形成の再習得を目的として行動するメンバー(通称:母親役)と、担任を中心として、社会生活能力の育成を目的として行動するメンバー(通称:父親役)とにわかれて、チームアプローチで子どもに対応したところ、明らかな行動上の変容が認められた。

本研究では、同様のアプローチを保育園・幼稚園で行うが、保育園・幼稚園には養護教諭は配置されていないので、保育園・幼稚園内での役割分担を決めたチームアプローチを行った。

実際には、保育園内での保育士、幼稚園での教諭には限りがあるため、管理職(主任や園長など)が母親役を分担したり、補助保育士、補助員や看護師などが母親役を分担したりして対応した。

マルトリートメントを受けている子どもならびに子ども集団への影響について、検討した。

また、一次予防および二次予防的アプローチについては、協力市町村において妊娠届出票を用いて、子育てに対する不安や養育状況に

について調査し、どのような子育て支援が望まれるかに関して、予備的な調査を行った。

また、PT 技法を簡単にまとめた A4 一枚のプリント(図 2)を作成し、協力児自体において、1歳半健診や3歳半健診などで配布し、その感想をもとめ、保護者および支援者のニーズ調査を行った。

図 2 簡易版 PT プリント



(小学館 小学2年生連載原稿から作成)

上記の研究にあたり、山形大学医学部倫理委員会の許諾を得た。

4. 研究成果

幼児期の被虐待児に対して、支援者が PT 技法を用いてチームアプローチで対応したところ、最終的には8名のうち7名で行動異常の程度が著しく改善し、特別な配慮をする必要がなくなった。残る1例でも、家庭内の行動異常が残存したものの、保育園・幼稚園内での行動異常はほぼ消失した。

ただし、特別な配慮をする必要がなくなるまでに、1例を除き2年以上、最長で4年のアプローチが必要であった。すなわち、保育園・幼稚園の期間のみでは介入終了に至れず、小学校でも介入を行っていただく必要があった。

これまでの小中学校での介入では、行動の改善は得られていたが、特別な配慮をする必要がなくなるほどの効果は得られておらず、幼児期における早期介入の重要性が示唆される結果となった。

妊娠届出票を用いた検討では、妊娠がわかったときに「うれしい」と感じる妊婦が、10年前に比べて有意に減少していることが判明した。特に20歳未満、20歳以上25歳未満の妊産婦においては、より減少していることがわかった。

乳幼児健診の場における簡易版 PT プリントを用いた PT 手法についての紹介については、多くの保護者から、この手法が多いに「役立つ」、「役立つ」と思うという回答が得られ、子育て支援の意味でも PT 手法が有用である可能性があると思われる。今後の研究が待たれる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5 件)

- 1) 横山浩之 学習障害 脳科学辞典 1: 6672, 2016 DOI 10.14931/bsd6672 (査読あり)
- 2) 横山浩之 自閉スペクトラム症を疑われた愛着障害の症例について 太田ステージ研究会誌 26:35-8, 2016 (査読なし)
- 3) 横山浩之 保育でも家庭でも使えるペアレントトレーニング技法について あきた小児保健 52:25-45, 2017 (査読なし)
- 4) 横山浩之 子どもの生活環境に応じたメンタルヘルス向上のための工夫 乳幼児健康診査 小児内科 49(5):670-3, 2017
- 5) 横山浩之 最近の子どもの行動異常とその予防 福島県保健衛生雑誌 31:2-7, 2018 (査読なし)

〔学会発表〕(計 20 件)

- 1) 横山浩之 微細運動障害を示す子どもは増加していない 第 56 回日本小児神経学会 2014 年
- 2) 横山浩之 子育て支援から考える発達障害の臨床 平成 26 年度日本小児科医会群馬地方会(招待講演) 2014 年
- 3) 横山浩之 子育て支援から考える保育・幼児教育 秋田県小児科医会・園医の会(招待講演) 2014 年
- 4) 横山浩之 子どもの行動異常とその対策～発達を踏まえて考える 第 8 回日本小児科医療研究会(招待講演) 2015 年
- 5) 横山浩之 子どもの行動異常とその治療的介入 第 34 回香川県小児心身医学研究会(招待講演) 2015 年
- 6) 横山浩之 保育でも家庭でも使えるペアレントトレーニング手法について 平成 27 年度秋田県小児保健会(招待講演) 2015 年
- 7) 横山浩之 よりよい保育を考える 平成 27 年度日本小児科医会群馬地方会(招待講演) 2015 年
- 8) 横山浩之 不適切な子育てと子どもの行動異常 第 8 回虐待防止・県北シンポジウム(招待講演) 2015 年
- 9) 横山浩之 AD/HD の子どもと家族・保健・教育 第 10 回福島県 AD/HD 治療研究会(招待講演) 2016 年
- 10) 横山浩之 子ども虐待と支援者による介入・・・ペアレントトレーニング(PT)技法を用いて 第 15 回日本トラウマティックストレス学会(招待講演) 2016 年
- 11) 横山浩之 子どもの行動異常とその予防・・・小児科医だから出来ること 第

- 125 回日本小児科学会福島地方会（招待講演） 2016 年
- 12) 横山浩之 誰でも出来る発達障がい児への支援・・・小児科医だから出来ること 第 26 回日本外来小児科学会(招待講演) 2016 年
- 13) 横山浩之 佐藤利憲 富澤弥生 ペアレントトレーニング手法のマルチリートメントへの応用 第 11 回日本小児心身医学会東北地方会 2016 年
- 14) 横山浩之 保育・教育にペアレントトレーニング技法を活かす 平成 28 年度日本小児科医会群馬地方会（招待講演） 2016 年
- 15) 横山浩之 子どもの行動異常を予防できているか 第 9 回虐待防止・県北シンポジウム（招待講演） 2016 年
- 16) 横山浩之 小児科医からの提言・・・子どもを伸ばす関わり方 2016 年度 JDDnet 第 12 回年次大会（招待講演） 2016 年
- 17) 横山浩之 カタトニアを呈した自閉症スペクトラムの 4 例 第 27 回太田ステージ研究会 2017 年
- 18) 横山浩之 マルトリートメントによる行動異常： 愛着障害と発達障害の見分け方と介入への手がかり 第 59 回日本小児神経学会学術大会（招待講演） 2017 年
- 19) 横山浩之 最近の子どもの行動異常とその対策 第 36 回東北・北海道小児科医会連合会総会（招待講演） 2017 年
- 20) 横山浩之 愛着障害と発達障害・・・類似点と相違点、そして介入への手がかり 第 28 回日本嗜癪行動学会仙台大会（招待講演） 2017 年

〔図書〕(計 件)

- 1) 横山浩之 マンガでわかる魔法のほめ方 PT:叱らずに子どもを変える最強メソッド 190 ページ 小学館 2014 年 (単著)
- 2) 横山浩之 保育士・幼稚園教諭・支援者のための乳幼児の発達からみる保育 “気づき” ポイント 44 140 ページ 診断と治療社 2014 年 (単著)
- 3) 横山浩之 マンガでわかるおうちのルール 112 ページ 小学館 2017 年 (単著)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

取得状況 (計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

(1) 研究代表者

横山 浩之 (YOKOYAMA HIROYUKI)
福間県立医科大学・ふくしま子ども女性
医療支援センター・教授
研究者番号：40271952

(2) 研究分担者

小林 淳子 (KOBAYASHI ATSUKO)
山形大学・医学部・教授
研究者番号：30250806

富澤 弥生 (TOMIZAWA YAYOI)
東北福祉大学・健康科学部・教授
研究者番号：60333910